

微妙音

発行所
無量山 真宗寺

☎ 862-0911
熊本市東区健軍4丁目17-45
TEL (096) 368-3759
FAX (096) 368-3780
E-mail: shinshuji@triton.ocn.ne.jp

郵便振替: 01960-6-52645
加入者名: 真宗寺事務局

水俣から見る不知火海

新年、おめでとうございます。
本年もどうぞよろしく願います。
下記の日程で、「御正忌報恩講」を
厳修いたします。
皆様の、ご参詣を心より
お待ちしております。

不知火忌

石牟礼道子を偲ぶ集い

二月七日(土)

勤行・午後二時

弾き語り・坂口恭平さん

(作家・アーティスト)

記念講演・藤原辰史さん

(京大教授)

参加費・千円(先着八十名)

御正忌報恩講

1月14日(水)～16日(金)

晨朝勤行 午前7時

日中勤行 午後1時30分から

法話 4時まで

講師・武宮 信勝師

(長崎・本照寺住職)

※日中勤行前のお斎はありません。
お持ち帰りいただき、お土産を
用意させていただきます。
勤行の時間からお参りください。

受付日程

14日(水) 西無田

15日(木) 新外、三郎

16日(金) 上無田

当番地区以外の方は3日
間の期間中、お時間の
ある時にいつでもお参り
ください。
16日の最終日は御満座法
要として、特別な法要が
勤まります。



「人ばたすくる坊さんにな
れよ」。真宗寺に五十年の長
きにわたり、ご縁を結んで下
さった西村文子さんの言葉だ。
私が住職になった時に、この
言葉を送ってくださった。

その西村さんが真
宗寺に向かう道中の
駅で、くも膜下出血
で倒れ、意識の戻ら
ないままに亡くなっ
ていった。「はって
でも、死ぬまで真宗
寺に来るぞ」と常々
言っていた言葉の通
り、最期まで真宗寺
に心を向け、足を運び続けて
くれた。

西村さんは、若い頃から水
俣病患者のところに通い、あ
んなまをしたり鍼灸をしたり、
生涯患者の方々を思い続けて

新年の挨拶

住職・佐藤 薫人

今年で水俣病公式確認から
七十年になる。私たちは今、
水俣から何を学ぶのか。毒に
侵された海を埋め立ててされ
いにしたら、水俣病の問題が
解決したのではない。
埋め立てられた海の
底に、今もなお毒が
ある。その毒に侵さ
れた海を私たちは感
じ続けていかなけれ
ばならない。私たち
人間の罪業をどこま
でも引き受け続けて
下さっている海や大
地がたしかにそこにはある。
人を助けたいけれど助けら
れない。寄り添いたいけれど
寄り添えない。「なんばしよっ
とか」という西村さんの声が
今も私に響いてくる。

親戚でもある野球選手の村上宗隆君が
昨年お寺に来てくれました



あけまして
おめでとうございます

令和8年(2026年)・年回忌表

- | | |
|------|------------------|
| 1周忌 | = 令和 7 (2025) 年 |
| 3回忌 | = 令和 6 (2024) 年 |
| 7回忌 | = 令和 2 (2020) 年 |
| 13回忌 | = 平成26 (2014) 年 |
| 17回忌 | = 平成22 (2010) 年 |
| 23回忌 | = 平成 16 (2004) 年 |
| 25回忌 | = 平成14 (2002) 年 |
| 27回忌 | = 平成 12 (2000) 年 |
| 33回忌 | = 平成 6 (1994) 年 |
| 50回忌 | = 昭和52 (1977) 年 |

上記表が令和8年(2026年)のご法事の対
象の年になります。日程が決まりましたら
からお早めにお寺までご連絡ください。

野の花ば手折りし仏にたむければ わらいづらして母の磯節きこえくる

真宗寺に50年近く縁を結び、最期まで足を運び続けて下さった西村文子さんが昨年9月20日に、真宗寺の秋彼岸会法要に向かう道中の水俣駅でくも膜下出血で倒れ、10月4日に79歳で亡くなった。葬儀はお兄さんがおられる湯布院で近親者のみで営まれ、12月14日に縁のあった方々が集まり、水俣のおれんじ館でお別れの会が開かれた。

お別れ会では最初に読経があり、その後は、参加者がそれぞれに西村さんとの思い出を語った。お別れの会終了後は、本人の遺言であった水俣の不知火海に散骨をした。

喜怒哀楽 感情のままに 生き抜いた西村文子さん



「西村文子さんのこと」
東京科学大学教授
中島岳志さん

私の故郷にいまだに立ち
迷っている死霊や生霊の言
葉を階級の原語と心得てい
る私は、私のアニメズムと
ブレアニズムを調合して、
近代への呪術師とならねば
ならぬ。

石牟礼さんは「死民」とい
う言葉を使った。あるいは「生
類」という言葉も使った。石
牟礼さんの対話の相手は生き
ている人間だけではない。亡
くなった人や非人間も、魂の
レベルで対話を繰り返す存在
だった。だから石牟礼さんは
文学の言葉が必要とした。

石牟礼さんは「沈黙」を大
切にした。水俣病の過酷さを
雄弁には語らない人たちの沈
黙こそが「存在の根源から発
せられている」ものであり、



求俣の不知火海に散骨

そこに「最深部の思想」があ
ると見なした。

西村さんは、水俣病被害者
の人たちに、黙って「按摩」
を続けた。彼女は、沈黙の
なかで会話ができた人だった。
西村さんが、私の講演会で
多くの聴衆がいるなか、質問
をしたことがある。彼女はマ
イクを独占して、5分ほど話
し続けた。会場の人は、西村
さん独特のなまりの言葉をほ
とんど理解できない様子だっ
た。しかし、私は不思議と西
村さんが何を言っているのか
ほとんど理解できた。私に方
言を理解できる能力があった
のではない。私はその時、西
村さんの魂のコトバを聞き取
ることができたのだ。

哲学者の井筒俊彦は「言
葉」と「コトバ」という概念
を使い分けた。「言葉」は通常、
意味を表すために口で言っ
たり文字に書いたりするもので
ある。しかし、「コトバ」は時
に声や文字にならない。魂の

次元でのやり取りが成立し
ているときにあらわれるもの
である。西村さんは、自分の
言っていることが私に伝わり、
満足そうな様子だった。
西村さんは、ごまかさない
人だ。怒るときは本気で怒り、
楽しいときには満面の笑みを
浮かべる。違うと思ったこと
には、容赦なく「違う」と言
う。

私は西村さんに読んでも
らっても、恥ずかしくないも
のを書かなければならないと
思っている。これからもその
ことは変わらない。

自らの身心の有り様、立ち
振る舞いが定まって渡世して
いる者、すなわち他者にどれ
ほど激しく非難されようが一
切言い訳をせず、損得で態度
を変えることなく、無様な姿
である。

帰敬式を受式して

昨年10月26日、真宗寺にて帰敬式が勤まりました。16名が
受式され、本堂の照明が消され蠟燭のあかりだけが灯る中で
儀式が執り行われました。

受式者一人一人の髪に剃刀を当てていく「剃刀の儀」の後、
仏弟子として仏さまから授けられた法名をお伝えする「法名
伝達」があり、参加者全員でお勤めを行いました。

今回、受式者のお一人に受式された感想を書いていただき
ましたので、掲載します。

岩下 美智子

私が住職と初めてお
話をしたのは二〇二五
年五月、自宅で家族
揃って父の看取りをし
た飯通夜の日でした。
父から葬儀は佐藤住職
にお願いするよう頼ま
れていましたので、す
ぐに來ていただいて安
心したことを覚えてい
ます。

翌年の四月には熊本
地震が起こり不便な避
難生活を経験、水の大
切さを痛感しました。
二〇一九年に母が亡



くなり実家に
あった仏壇を私
の住まいに移し
て毎月の読経を
続けてお願いし
ています。今で
はお坊さんとの
会話が楽しみと
なりました。
二〇二〇年か
らの三年間はコ
ロナ禍で世界的
なパンデミック
。コロナ感染
が落ち着いた頃
退職して自由な
時間が増えまし
たので、毎月の
親鸞聖人御命日
定例法座に参加
するようになり、両親が熱心
に通っていた真宗寺で浄土真
宗の内容を私なりに少しずつ
理解できるようになってき
ました。

そんな折、十月に帰敬式が
あると案内がありましたので
受式を決定。当日は十六名が



受式。皆さん早めに集合され
ていました。少し緊張しなが
ら指定された席で説明を受け
て略肩衣をかけました。
帰敬式は「剃刀の儀」「法
名伝達」「勤行」で無事終了。
受け取った法名を確認して
ホッとしました。

季節は冬、最近の気候は
秋を待たずに急に寒くなる
傾向が強い。先週くらいま
で暖かったと思うと急に
寒くなり、慌ててストーブ
を出したりと夏物から冬物
への衣替えのタイミングも
難しい。今年はニュース等
で二季という聞き慣れない
言葉を耳にした。春と秋が
なくなり夏と冬の二季にな
るらしい。急な気温の変化
から体調を崩される方も多
いようで、これからいろん
なところで異常気象の影響
が出てくるのだらう。

目ざかり月誌

あの時もう少し話をして
おけばよかった。聞きか
じった仏教の言葉を並べて
は、何とかモヤモヤした気
持ちは抑えようとするのだ
が、それでは間に合わない
この世のさが、また首を
もたげては私の心の中でわ
だかまっている。

に就職されたりして、一人
暮らしをされている方が非
常に多い。最近、若くして
奥さんを亡くされ、一人暮
らしをされている男性の方
がお宅にお参りする機会が
あった。今までも何度か月
忌参りでお伺いしていたの
だが、その時はいつもより
少し元気がないように見受
けられた。私がお勤めを終
えて、出してもらったお茶
を飲んでみると、寒くなる
と奥さんの事を思い出して
辛くなるのだと、ポツリポ
ツリとうつむき加減で、ど
こか遠くを見るようにしん
みりと語り出された。
その姿を見て、昔聞いた
宮沢賢治の言葉を思い出し
た。「世界ぜ
んたいが幸
福にならな
いうちは個
人の幸福は
あり得ない。」この言葉が私
の記憶の片隅から一瞬間を
覗かせた。自分一人助かつ
ていい気になるなと、厳
しく叱責されたような気が
した。もしお浄土のはたら
きがあるとするならば、孤
独を一人背負い、寂しくし
ている方の姿にこそあるの
かもしれない。帰りに際に「お
経を聞いたら少しほっとし
たよ」と言われた時は私も少
しほっとした。

（古賀 彰）



真宗寺の三男を抱く西村文子さん

とる。沖縄の民意がそん子の
体中からあふれにじみでてい
た。
「学校ではいじめられるろ
う」「はい！死ぬ！といわれま
す」「ほくは人はだれでも死
ぬんだ！とさげふんです」と
力づよくいうた。
（そんとおり）
「負けるな、そんまのびろ。」

二〇一九、五、二五

いのちの祈り その6

―「群萌の会」講義録―

宗正元師 講述

自在に生きる者

世自在王仏の説法を聞いて、

すべての人を救いたいと生まれ出て来た菩薩が法蔵菩薩です。そういう物語で語ってあるのが『無量寿経』です。南無阿弥陀仏の歩みを物語で語ってある。それが經典の非常に尊いところですね。理論的に語ってあるわけではない。お念仏の道は、こういう風に歩み続けてきた人の歩みなんです。

そして、どのようにしてこの世を生きる人を生んできたのかというと、世を自在に生きる人です。お念仏を通してどうなるのかというと、世を

自在に生きる者になるんです。世自在王仏という名は、この世を自在に生きる仏、世を引き受けるような王です。どのような世の中になろうとそれを引き受ける。そういう歩みの中から生まれ出て来たのが法蔵菩薩。世自在王仏の説法を聞いて、無上正真道の心を起こした。人間に生まれてきたことの意味はなにか。人間の一生涯というの、どのよう

な人でも平等なんです。それが正真道です。正真というのは、平等をあらわす。平等を貫いている。どのような人にも一貫している。一道と言ってもいい。どんな人の人生であれ、その人

生がかけがえのない人生であることをあきらかにしている。どのような人生であれ大事な意味を持っている。幸せであれ、不幸であれ。世の中でどんな出来事が起こるにしろ、そういうものに妨げられない。そこに大事な生きる道を開いてくださる。それを「無上正真道」という。

学ぶ人、聞く人

そして法蔵菩薩は沙門になった。沙門というのは学生です。学ぶ人。聞く人。南無阿弥陀仏の魂です。私どもは念仏を唱えてどんな人になるのか。法蔵魂をいただいている。法蔵魂をいただく人とはどんな人か。どのような人の人生であれ、そこに平等にあたえられた人生を生きる人です。法蔵魂とはどんな魂か。どんな人生でもそこにかけてがえのない尊い意義を見出していくようなそ

ういう魂です。そういう求道心を起こし、学び続けていく沙門となる。この沙門というのは、私にとつて忘れられない言葉でね。共に親鸞聖人の道を歩んでいく友達の一人に宮城顕君という人がいるんですが、宮城君と時々、安田理深先生を訪ねて行っていたのですが。ある時安田先生に「君たちは大家になつてはいないか。僕はまだ学生なんだよ」と言われま

した。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

た。何でも分かった気になつてい

行事予定

1月 9日 (金) 餅つき 午前10時
11日 (日) 新年会 午後4時
13日 (火) 御逮夜 午後5時
14日 (水) 御正忌報恩講
16日 (金) 講師：武宮 信勝 師

28日 (水) 定例法座 『正信偈』に聞く
2月 2日 (月) 『歎異抄聴記』輪読会
7日 (土) 不知火忌 午後2時
11日 (水) 脳トレ健康体操
25日 (水) 脳トレ健康体操
28日 (土) 定例法座 『正信偈』に聞く

3月 2日 (月) 『歎異抄聴記』輪読会
11日 (水) 脳トレ健康体操
12日 (木) 仏具磨き 午前10時
19日 (木) 春・彼岸会法要
21日 (土) 講師：高島 靜心 師
25日 (水) 脳トレ健康体操
28日 (土) 定例法座 『正信偈』に聞く

■定例法座『正信偈』に聞く ⇒午後1時30分
■『歎異抄聴記』輪読会 ⇒午後2時00分
■脳トレ健康体操 ⇒午後2時00分

※各学習会、行事については日程を変更する場合もありますので事前にお問い合わせください。

☎096-368-3759

✉shinshuji@triton.ocn.ne.jp

真宗寺 ホームページ

URL <https://www.shinshuji-kumamoto.com>

ども、群萌が何をするのか。聞法する会でしよう。なんのために集まっているのか。法を聞く。どうやって法を本当に生きることになるのか。どういうことが人間に生まれてきたことの喜びなのか。そういうことをどこまでも聞く。聞くということとはただの参考に聞いておるわけではない。信順すると言つてね。従つていく。それが喜びだろうと、そうでなかつたら信順していく。聞くということを通して信がある。信といつても信順ですよ。なるほどそうなのかと領いていく。そしていよいよ聞く人になる。聞くというのは、そういうことが人生なのか、世の中なのかとそこで終わりではなくて、そこでいよいよ聞く人になる。「総序」の文の最後の締めくくりの言葉はそういうことになっておる。「聞くところを慶び、得るところを嘆ずるなり」と。得るところを嘆ずるなりと。すけれど、それは自己を見出すことです。自分自身の一生涯とは、どういう一生涯であるのか。自己とはいったいどういう己を自己として目覚めるのか。

法名をいただく

真宗寺の前の住職は愚芳という法名がついておられますけれども、「愚かな」ということを非常に大事にしていかけた。愚かな身に帰ると。愚かな身というの、頭が悪いとかそういう意味ではないです。自分自身が分かつていない。人生が分かつていない。人生の喜びとか、そういうことが本当の意味で分かつていない。ですから聞くんです。人間に

生まれしてきた喜びとは、いったいどのような喜びなのか。喜びを見出した人に聞く。『正信偈』に出ておる七人の方々は皆喜びを見出した方ですよ。その喜びを見出された南無阿弥陀仏の道を私も歩いていこうと。南無阿弥陀仏をいただいている人になるということが信順です。そしていよいよ聞く人になると。それを締めくくりにはね。「聞くところを慶び、得るところを嘆ずるなり」と。こういう言葉で言いあらわしておる。それ以外の何物でもない。

最後の「と」の字はそういう意味ですよ。『教行信証』を開かれるとね、「と」という言葉が多いんですよ。つまり、よき人の七高僧のような方々のお言葉をいろんなところに取り上げられてありますけども。「何々である」と。そこにも「と」がついている。つまり七高僧のような方々が、こういうことを私達に呼び掛けて下さるという領きが「と」です。ただ言葉を参考にあげてあるのではない、私どもに呼び掛け、呼び返して下さつておる。こういう言葉で私共に呼び返して下さつておると。そういうことが「と」の字です。単なる考えが述べられておるのではない。それは、どこまでも私どもに呼び掛け、呼び返して下さつておる言葉です。そういう意味をあらわすのが、最後の「と」の字ですよ。

世間では、南無阿弥陀仏ぐらいで助かるかというようなことがあります。親鸞聖人の時代にも世間がお念仏を非難することがあった。ちゃんと修行して勉強しないと助から

ない。ただグダグダ遊んで、なんの努力もせずに聞くだけで助かるのか。そういうた中で「愚かな身に帰れ」と言われた。法然上人は「愚者になりて往生す」とおっしゃった。愚かな身に帰ろうじゃないかといって、呼び掛けていかれた方です。念仏が救うんだと。愚かな身に帰れ、南無阿弥陀仏が救うと。そういう我々を南無阿弥陀仏が救ってください。こういうことを本当に一生涯叫び続けていかれた。それで仏教界から弾圧された。

仏教というものは当時は聖者を目指す道です。ちゃんと修行して、戒を保つて。戒を保つということが中心になってます。だから皆、仏さまの教えを聞く身になるということとは、まず第一に戒を保つんです。だから戒名というんですよ。法名は南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏をいただいている本願をいただいている。本願に立ち返っていく。本願を生きる身になる。そういう生き方を示していくのが法名をいただくことです。

法名は死んでからいただくものではないですよ。生きておる方もいただけます。私も法名をいただいておりますが、それに相應しい生き方をしておるのか。そこが大問題ですね。南無阿弥陀仏をいただく。お念仏の生涯を送っていく。そんなことは頭にもない。法名をいただいたら、何だか仏さまに助けていただけるのかという程度です。そうではなくて法名をいただくということは道をたまわります。

(次号に続く)